

## 【論 文】

# 学会ブース展示によるアウトリーチ活動の研究†

上條史絵\*<sup>\*2</sup>・丸山一男\*<sup>\*3</sup>・丸山淳子\*<sup>\*4</sup>・浅田啓嗣\*・伊藤和寛\*・牛田健太\*<sup>\*3</sup>・横地歩\*<sup>\*2</sup>・島岡要\*<sup>\*5</sup>

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部\*・三重大学医学部附属病院麻酔科\*<sup>\*2</sup>・三重大学大学院医学系研究科麻酔集中治療学\*<sup>\*3</sup>・鈴鹿医療科学大学医工学部\*<sup>\*4</sup>・三重大学大学院医学系研究科分子病態学\*<sup>\*5</sup>

公的な資金援助を受けて行う研究・教育事業では、成果を社会に発信するアウトリーチ活動が要求される。アウトリーチ活動にはホームページやソーシャルメディアなどインターネットを活用した発信、パンフレット配布、シンポジウム開催などが定番であり、それぞれ長所と短所がある。我々は「三重大学・鈴鹿医療科学大学合同慢性疼痛チーム医療者育成」事業のアウトリーチを、学会ブース展示を出展し行う新たな取り組みを実践してきたので、アウトリーチの有益性を高める工夫について検討し文献的な考察を加えて報告する。

**キーワード：**ブース展示、アウトリーチ活動、サイエンスコミュニケーション、慢性疼痛、多職種連携

## 1. はじめに

大学等公的機関の研究活動や、公的資金を使って行った活動は、説明責任の一環としてその成果を社会に発信し還元する広報活動が求められる。例えば国の第3期科学技術基本計画（2006年度～2010年度）では「科学技術に関する説明責任と情報発信の強化」が謳われている。以来、研究活動の社会への開示と分かりやすい説明は研究機関や研究者の責務とされ、そのために様々な媒体を利用するアウトリーチ活動<sup>1)</sup>が推進されてきた（内閣府 2006）。ここでいうアウトリーチ活動とは「研究者等と国民が互いに対話しながら、国民のニーズを研究者等が共有するための双方向コミュニケーション活動」である。ここで重要なのは“双方向性”であり、『国立大学法人経営ハンドブック（3）』では、「科学者等と国民が互いに対話しながら信頼を醸成していくこと」に意義があると述べられている（国立大学財務・経営センター 2005）。

我々研究者と研究機関は、その活動において一方的な情報伝達ではなく、社会・市民が何をどう理解して、我々に何を求めるのかを汲み上げ、それに応えていくことが必須とされている。科学技術分野以外でも、多額の公的研究費が投入される課題研究（プロジェクト）においても同様に双方向のアウトリーチ活動が必要だろう。

三重大学・鈴鹿医療科学大学の合同事業「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成」は、平成28年度文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に選定された教育プロジェクトである。我々はこ

の事業のアウトリーチ活動の一環として、学会ブース展示を活用する新たな取り組みを行っている。本論文では、現在までの成果と今後の展望に文献的な考察を加えて報告をする。

## 2. アウトリーチ活動について

### 2.1. アウトリーチ

文部科学省によると、アウトリーチ活動は「国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め、かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため、研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション活動」（文部科学省 2005）であり、さまざまな形態がある。代表的なものはホームページの作成やニューズレター・パンフレットの発行であり、これらはプロジェクト専用のものと研究機関のもの、両方が作成されそれぞれに記事が掲載されていることが多い。他にもシンポジウム、公開講座、サイエンスカフェや講演会、一般的な学術活動の学会発表、論文発表、各種報告書等があり、また小中高生向けの特別授業や、近年、社会への発信ツールとして隆盛の各種ソーシャルメディア・ネットワークもアウトリーチ活動に含まれる。多彩な手法のそれぞれに、スケール、費用、対象者数、簡便性、時間的継続効果など、メリットとデメリットがある。

### 2.2. ブース展示 (booth exhibition)

Soilen, K. S. (2013) によると、ブース展示はおおよそ過去20年間で進化し、重要性を増している。それ

まではマーケティング戦略上の各種の広報・宣伝方法から意外なほど排除されていたが、近年は来場者側も展示者側もその効果を認識して、有効な活用方法を模索し、発展し続けている (Soilen, K. S. 2013)。

特に学会でのブース展示となると、対象者が専門家集団であることの効率性、費用対効果の高さ、短期間（短時間）での効果、双方向性、即時性、と多くのメリットがある。展示内容が一般向けでないからこそ、その凝縮された効果が期待できるとも言えよう。この点では、費用対効果の大きさとしても評価できる。一般市民と比して、研究内容に関する理解が容易であることはもちろん、展示者側にとっても、専門家集団とリアルタイムに交流が可能で、研究内容に対しての反応やフィードバックを得ることができ、即時にその後の研究活動へ反映できる点は、他のアウトリーチ活動にはみられない長所である。アウトリーチ活動の主たる対象である市民・国民は、この専門家集団のすぐこう側に存在している。ブースから提供された情報が対象者へ届く時間も短くてすむ上に、媒介する専門家集団は専門的知識があるので、市民・国民への情報伝達に際して誤解や曲解を生じる可能性も少ない。

アメリカでは学会や研究会でブース展示が広く行われているが、日本ではほとんど見られない。多くが企業による商業的物品の販売促進が目的のブース出展であり、今回収集できた実践例もごくわずかである。本論では我々のプロジェクトで実践した学会でのブース展示について報告し、本邦での研究アウトリーチ活動の発展につなげたいと考える。

### 3. 本プロジェクトの学会ブース展示の概要とアウトリーチ有益性の検討

ここではわれわれが行った学会ブース展示の概要と、アウトリーチ活動を実践する際に参考になるブース展示の実践的なノウハウについて説明し (3.1～3.2)、またアウトリーチ活動の有益性を検討するために来場者のコメント (3.3) と、アウトリーチを行ったブース担当者 (3.4) のコメントと反応を集計・解析し、考察を行う (3.5)。

三重大学・鈴鹿医療科学大学の合同事業「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成」は、慢性疼痛に関するプロフェッショナルな人材養成を目的とする教育事業である。三重大学からは医学科・看護学科の学生が、医療系総合大学の鈴鹿医療科学大学からは管理栄養学・臨床検査学・理学療法学・医療福祉学・臨床心理学・鍼灸学・薬学・看護学を学ぶ学生が参加して、

慢性疼痛と関連領域および多職種連携医療について学ぶ。1 年次後期には 2 つの大学を遠隔講義システムで繋ぎ、痛みに関する多様な専門領域の講義 15 回を履修する。2 年次夏には集合して 3 日間の体験型ワークショップを受講し、講義とワークショップの 2 つの単位を併せてコース修了する構成となっている。コース修了者には、三重大学・鈴鹿医療科学大学両方の学長名で修了証を発行している。事業開始から 2019 年前期までに、ワークショッププログラム 3 回、講義プログラム 2 回が開講された。これまでの両大学併せての合格者は、以下の通りである。1 年次後期に講義を行い、翌年度 2 年次前期にワークショップを行うので、どちらかみの単位取得者もいる。

・ワークショップ単位合格者	137 名
・講義単位合格者	901 名
・コース修了生	66 名

#### 3.1. ブース出展までの流れ

本プロジェクトでアウトリーチ活動の実施を検討した際、海外の学会でアカデミア領域の出展をしばしば見ていたメンバーから、学会でのブース出展が提案された。その場にいたメンバー全員、そのような業務の経験はなかったが、新しい試みとして取り組むこととなった。以下に出展までの流れを述べる。

##### 3.1.1. 出展学会の選択

まずは、プロジェクト内容の訴求に相応しい学会の選定を行った。慢性疼痛に関連が深い領域の学会として、2018 年 4 月に開催される東海・北陸ペインクリニック学会第 29 回東海地方会に申込みをした。同時にプロジェクトに関する口頭発表も、演題申込みをする運びとなった。プロジェクトメンバーの一部と同会の大会長に知己があったことで、本邦では稀なブース展示という新たな取り組みが実現しやすい面があったと思われる。当日の会場では予想外に多くの来場者があり、次年度の同会の大会長から来年もぜひ出展を、との申し出があり、翌年 5 月の第 30 回大会にも申し込むことになった。

2018 年 4 月の同会に続き、同年 12 月の第 11 回日本運動器疼痛学会にも出展することとした。ペインクリニック学会と同じく慢性疼痛に関連が深い領域の学会であり、また近接領域の医療系専門職の人たちの参加も多く見込まれた。翌 2019 年 12 月には、疼痛と関係が強く、多職種連携医療の歴史もある緩和ケア領域の「日本緩和医療学会第 2 回東海・北陸支部学術大会」

が三重大学で開催された。運動器疼痛学会と同様に、近接領域の医療系専門職の参加が見込まれるため、同会にも出展を申し込んだ。

### 3.1.2. 申込み

事務局の指定通りに、申込み書類を送った。通常の学会発表では大会ホームページに申込みや登録方法が記載されるが、ブース出展については掲載されていないことがほとんどである。申込みに関する情報取得は、事務局に問い合わせるなどして進めた。この点は、学会発表とは異なり、注意が必要な点である。

### 3.1.3. 会場

学会事務局から指定された会場とスペースがあり、そこに設営をする。2区画を申し込みれば広く確保できるが、その分出張料も2倍となる。

## 3.2. ブース展示について

### 3.2.1. 搬入と搬出

当日の設営は、学会から指定された方法と時間で行う。これは企業出展と同様である。会場によって、搬入口使用のルールや使用車両の申告などが求められることもあるので、事前の準備は慎重に行う。搬入も搬出と同様に、学会事務局の指示に従う。

### 3.2.2. スペース

おおむね1ブース幅1.8から2m程度の広さがあった。そこに設置する机・椅子の他に、掲示用のホワイトボードや板が用意されることがある。会場内での出

入口との距離や他ブースと並んだ位置によって、来場者の目に留まりやすいかどうかが異なると思うが、場所は学会事務局から指定されるので、出展者側が選ぶことは出来ない場合が多い。ただし、主催者との交渉の余地はあるかもしれない。

### 3.2.3. 展示物

毎回、事業パンフレット表紙の特大刷りをA1サイズのイーゼル上に縦に置いた。A2サイズのイーゼル2脚も用意して、事業概要や講義の一覧、ワークショップの様子の写真などをブース机より前方に横向きに置き、来場者から見やすくした。

### 3.2.4. 配布物

事業パンフレットと両大学の案内冊子を用意した。1回目の東海・北陸ペインクリニック学会第29回東海地方会ではクリアファイルのノベルティを、3回目の東海・北陸ペインクリニック学会第29回東海地方会では事業内容に関する論文（上條ほか2019）の別刷りをそれぞれ加えて配布した。ブース展示4回目の日本緩和医療学会第2回東海北陸支部学術大会では、事業に関して開催予定の慢性疼痛診療研修会および、合同シンポジウムのチラシを配布した。また、ブース前で足を止めた来場者には、出来る限り事業内容の説明およびパンフレット等の配布をした。

計3回のブース出展について、表1-3に概要を示す。

表1 東海・北陸ペインクリニック学会 第29回 東海地方会 ブース展示

学 会	東海・北陸ペインクリニック学会 第29回 東海地方会
日 時	2018年4月28日（土）
開催場所	ウインクあいち（愛知県産業労働センター）
会 場	会場の1室が展示会場とされ、出展ブースが並べられた。入口右手前から3つ目の場所であった。出展ブースを廻るスタンプラリーでは、景品が渡された。
コンテン ツ	掲示：事業ポスター、プロジェクト概要の紹介、単位取得と修了の仕組みの紹介、講義内容一覧、ワークショップの様子（写真含む） 配布：事業パンフレット、三重大学案内冊子・鈴鹿医療科学大学案内冊子・ノベルティ（クリアファイル）
学術講演	口頭発表「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成」横地歩（三重大学）
ほか	出展ブースを廻るスタンプラリーが行われた。



写真1 ブース展示

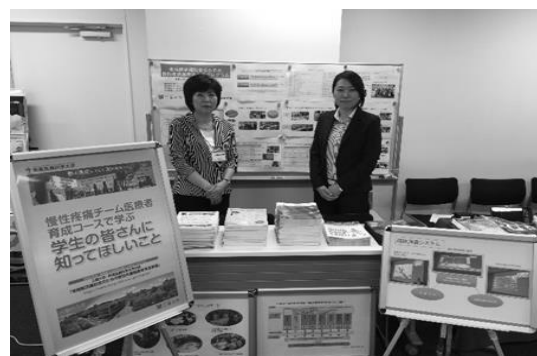


写真2 ブース担当者①

表2 第11回日本運動器疼痛学会 ブース展示

学 会	第11回日本運動器疼痛学会
日 時	2018年12月1日(土)・2日(日)
開催場所	びわ湖ホール ピアザ淡海(滋賀県立県民センター)
担 当	浅田啓嗣・伊藤和寛(鈴鹿医療科学大学)・上條史絵(三重大学)
会 場	主な会場とは別の場所、建物廊下に出展ブースが並べられた。展示場所近くの会場では、ランチョンセミナーなどが行われた。
コンテン ツ	掲示: 事業ポスター、プロジェクト概要の紹介、単位取得と修了の仕組みの紹介、講義内容一覧、ワークショップの様子(写真含む) 配布: 事業パンフレット、三重大学案内冊子、鈴鹿医療科学大学案内冊子
学術講演	シンポジウムⅡ『慢性疼痛の診療に関わる医療者育成の展望』 ・中村喜美子(鈴鹿医療科学大学)「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者 育成コース」～慢性疼痛チーム医療を推進 するリーダーの育成～ ・島岡要(三重大学)「慢性疼痛チーム医療者育成のためのコミュニティ構築をサポートする専門職の必要性」

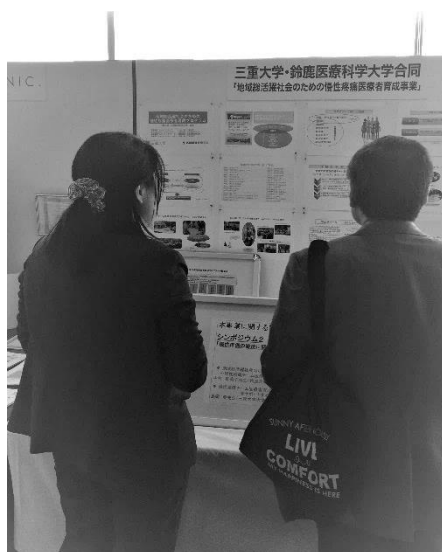


写真3 プロジェクトについて説明する

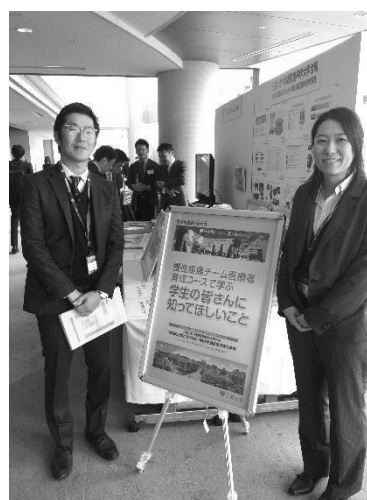


写真4 ブース担当者②

表3 東海・北陸ペインクリニック学会 第30回 東海地方会 ブース展示

学 会	東海・北陸ペインクリニック学会 第30回 東海地方会
日 時	2019年5月11日(土)
開催場所	ウインクあいち(愛知県産業労働センター)
会 場	会場の1室が展示会場とされ, 出展ブースが並べられた。入口を入ってすぐ右手の場所であった。前年の大会で行われた出展ブースを廻るスタンプラリーは実施されなかった。
コンテン ツ	掲示: 事業ポスター, プロジェクト概要の紹介, 単位取得と修了の仕組みの紹介, 講義内容一覧, ワークショップの様子(写真含む) 配布: 事業パンフレット, 事業に関する論文(上條・丸山ら 2019) 別刷, 三重大学案内冊子, 鈴鹿医療科学大学案内冊子
学術講演	口頭発表「慢性疼痛多職種連携医療教育の試み(2)ーワークショップを中心にー」 上條史絵(鈴鹿医療科学大学)

※筆頭著者上條の所属機関は, 2018年度は三重大学大学院医学系研究科, 2019年度から鈴鹿医療科学大学となっている。

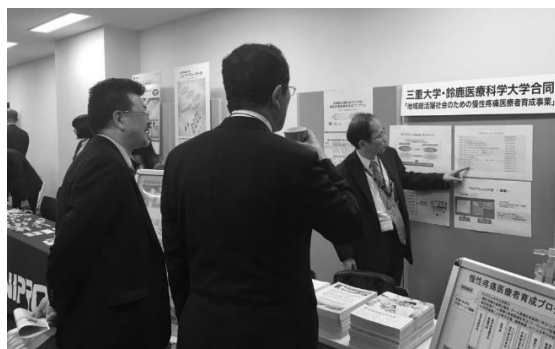


写真5 講義について説明する

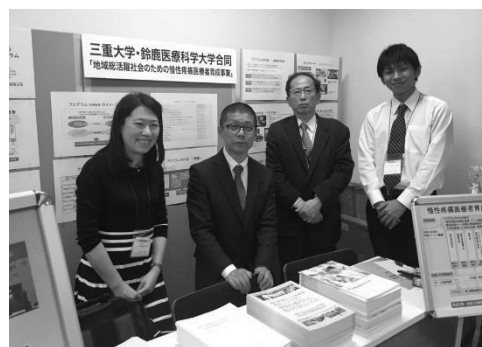


写真6 ブース担当者③

表4 日本緩和医療学会第2回東海北陸支部学術大会 ブース展示

学 会	日本緩和医療学会第2回東海北陸支部学術大会
日 時	2019年12月7日(土)・12月8日(日)
開催場所	三重大学医学部総合医学教育棟
会 場	会場である講義室の1室が区切られて, ブース展示とポスター発表, 在宅医療の実例, に分けられた。入口を入ってすぐ左側の場所であった。過去3回と比べ, 掲示スペースは最も広がった。本プロジェクトの学生サポーターによる, 掲示も併せて行った。
コンテン ツ	掲示: 事業ポスター, プロジェクト概要の紹介, 単位取得と修了の仕組みの紹介, 講義内容一覧, ワークショップの様子(写真含む) : 学生サポーターによるサポート活動の振り返りと今後の展開 配布: 事業パンフレット, 事業に関する論文(上條・丸山ら 2019) 別刷, 三重大学案内冊子, 鈴鹿医療科学大学案内冊子, 「第1回・第2回三重県慢性疼痛診療研修会」チラシ, 「慢性の痛みシンポジウム 慢性の痛みに対するチームアプローチ」
学術講演 など	本プロジェクト関連の教員, 医療者が癌性疼痛, がんチーム医療に関するランチョンセミナー, 口頭発表, ポスター発表を行った。 丸山一男(三重大学)ランチョンセミナー「便秘と漢方薬 ～効果のしくみ～」 向井雄向(三重大学医学部附属病院)口頭発表「脾臓がん患者の訴える背部痛に対

	<p>し鍼灸を行った 一症例」</p> <p>寺田憲弘（三重大学医学部附属病院）口頭発表「中咽頭癌頸部郭清術後の頸背部痛に鍼灸を用いた一症例」</p> <p>辻川真弓（三重大学）ポスター発表「三重県内 8 病院を結んだ多職種緩和ケアテレビカンファレンスの取り組み」</p>
--	--

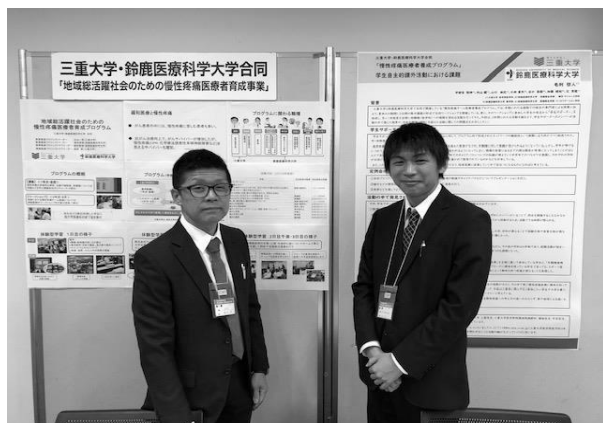


写真7 ブース担当者④

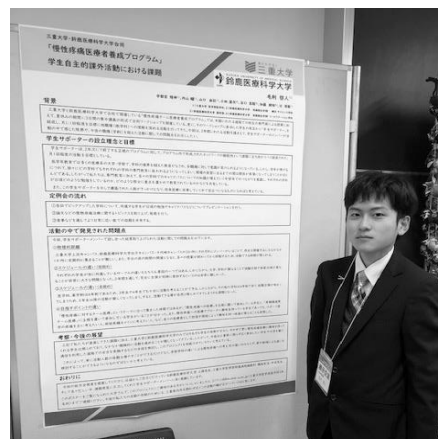


写真8 学生サポーターの展示

### 3.3. 来場者コメントの集計・解析

ブース展示1回目から4回目の、来場者コメントの集計を提示する（表5）. 複数の項目への回答を別々に集計し、延べ数としている。

プログラム内容へのコメントの次に、プログラムの講義とワークショップの内容を知って、自身も受講したい、あるいは職場の多職種に受講してほしい、という声が毎回あった。来場者の関心がプロジェクトやプ

ログラムの内容に向くことはもちろんだが、主に医療系専門職である現職者のニーズが明らかになった。大学連携への評価と修了した学生の就労やその後のネットワークへの関心は、地域医療への貢献に対する期待に繋がり、肯定的なコメントが寄せられた。慢性疼痛と並ぶ本事業の重要点である多職種連携医療教育に関する意見やコメントも多くあった。

表5 来場者コメントの集計

プログラム・授業の内容	現職者のニーズ	大学連携・卒業後の期待	多職種連携	その他	合計
28	12	9	7	2	58

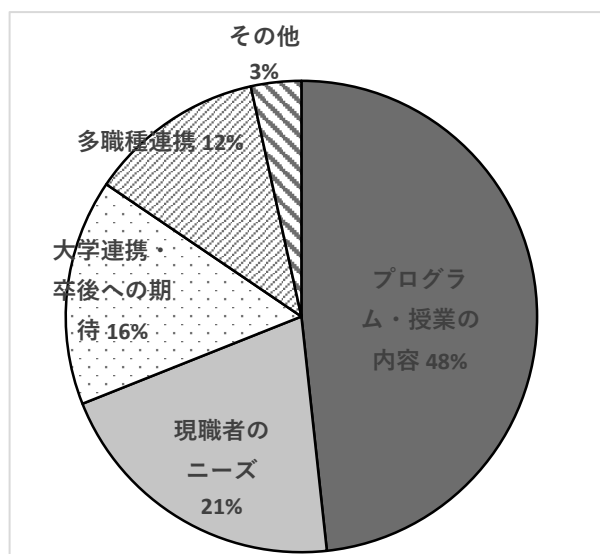


図1 来場者コメントの集計グラフ

### 3.4. 担当者の感想集計と解析

以下に、実際にブースに立って来場者に事業の説明や質疑応答をした担当者の感想をまとめる。

- ・(ペインクリニック学会にて) 理学療法士も多く参加しており、医師だけでなくコメディカルにも広報できて良かった。
- ・ワークショップの説明をすると、『学生向けではなく、臨床の医療者向けにも開催して欲しい』という声がいくつかあった。現在のワークショップは、医療者向けに実施してもよい質の高い内容だと感じた。
- ・企業の方から「慢性疼痛」とは何かと聞かれ、説明した。一般には「慢性疼痛」という用語や病態が浸透していないことを改めて感じ、社会一般に対する広報の必要性を感じた。
- ・成果について問われることも多く、時期を含めた成果判定について検討が必要だと感じた。コメントに苦労した。
- ・来場者とのやり取りから、チーム医療に対する関心は高いと感じた。
- ・普段の臨床、教育、研究活動では未経験の、自分たちの取組みをアピールする体験となった。
- ・事前の想定以上に来場者は関心をもって来て、プロジェクトに自信がもてた。
- ・少しずつでも活動報告や広報活動を続けていくことに意味があると思った。

出展ブースでは、あったら良い講義内容やプロジェクト、修了した学生の就労やその後のネットワークへの関心や今後の事業展開への期待なども寄せられ、プロジェクトの将来展望に有益なコメントも多かった。ブースに立った担当者としても、自分たちの活動の価値を感じられる体験となった。近接領域を含む専門家からの肯定的コメントは、学生からのフィードバックとも異なり、活動への理解を容易にしてもらえる分要点を突くもので、非常に参考になった。また、来場者のコメントから、今後の課題が浮き彫りになった。成果判定方法の検討や、一般向け啓蒙の必要性、あるいは多職種の専門職向けの講義やワークショップ実施の可能性などである。期待を寄せるコメントも多く、早期エクスポージャーによる卒後ネットワーク形成の取り組みや、今後の修了者が実力を発揮する機会を創設していくこと、など将来に向けた展望と責任を感じた。これらは来場者が医療、教育、専門家の視点で見られている結果であり、また担当者が実際にブースに立って直接意見を聞いたからこそ、感じられたことでも

ある。学会での出展ならではの成果と考えられる。

また、1～3回目のブース展示で現職者のニーズが多く寄せられたことで、4回目のブース展示では関連する事業である痛みに関する研修会と本事業のシンポジウム開催案内を行い、複数の来場者の好反応を得た。教育事業としての広報のみならず、現職者のニーズにも対応出来たことはブース展示の計画当初からすると予想外でもあり、回を重ねて発展することとなった。この点も、学会におけるブース展示というアウトリーチ活動の意義ある側面だと思われる。

### 3.5. アカデミアによるブース展示とアウトリーチ活動の有益性についての考察

ブース出展をした学会では、同時にプロジェクトに関する口頭発表を行った。2018年の東海・北陸ペインクリニック学会第29回東海地方会では、本プロジェクトに携わる三重大学医学部附属病院麻酔科の横地歩講師が口頭発表「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成」を行い、翌年の第30回東海地方会では筆者が口頭発表「慢性疼痛多職種連携医療教育の試み(2)ーワークショップを中心にー」をしている。また2018年12月の第11回日本運動器疼痛学会では、文部科学省「課題解決型高度医療人材養成プログラム」に関するシンポジウム『慢性疼痛の診療に関わる医療者育成の展望』が開催された。同年度に採択された大学と文部科学省の関係者が登壇して、慢性の痛みに関わる人材養成についてディスカッションをした。本プロジェクトからは、鈴鹿医療科学大学看護学部の中村喜美子准教授が「地域総活躍社会のための慢性疼痛医療者育成コースー慢性疼痛チーム医療を推進するリーダーの育成ー」と題して、三重大学大学院医学系研究科の島岡要教授(三重大学プロジェクトサブラダー)が「慢性疼痛チーム医療者育成のためのコミュニティ構築をサポートする専門職の必要性」と題して、それぞれ講演をした。

出展ブースでは、既に学会プログラムを見ている来場者から口頭発表と関連させるコメントや、内容を楽しみにしている等の発言があり、スタッフとしても嬉しく感じた。今般行った学会でのブース展示は、学術領域ならではのアウトリーチ活動であり、実際にブースに立ち、なおかつ発表もすることで、直接的な相互交流の効果の高さが感じられるものであった。ブース展示に加えて、研究発表や講演で学術的意義や実践内容についても情報発信をすることで、同時に複数のアウトリーチ活動となり、相乗して来場者の理解と認識が深まると共に、プロジェクトの訴求度も高いと考え

られる。

このように、関連領域での学会ブース出展は、プロジェクト担当者と専門家集団との実際のやり取りによるアピール効果も高く、そこで寄せられた反応やフィードバックは、即時に事業展開や次の活動に取り入れることが出来る。新たな視点で事業の将来的展望を得られるという点でも、専門家集団との双方向コミュニケーションからもたらされるものは大きい。学会でのブース展示は、今後の研究活動や課題型プロジェクトのアウトリーチ活動における有意義な方策として、新しい展開が見込まれる分野であろう。

#### 4. 実践例の紹介と先行研究からの考察

ここではアカデミアによるブース展示とアウトリーチ活動有益性についての理解を深めるために、関連する先行例や研究を文献的に考察する。

##### 4.1. 2つの形態の実践例

参考までに、直接的な交流を図る類似の実践例を紹介する。

###### 4.1.1. サイエンス AGORA

独立行政法人科学技術振興機構（JST）が主催する「サイエンス AGORA」というイベントがある。2006年から毎年開催され、これまでに14回を数える。「サイエンスアゴラ 2006～科学と社会をつなぐ広場をつくる～」は、東京お台場で3日間にわたり開催され、83団体、約150名の登壇者、104の企画出展、1500名以上の参加者があった。本論執筆時直近の2018年は、120の企画出展に約2600名の来場者があった。企画者は開催目的について、科学のコミュニティー同士が交流し議論を促進する「場」の創設と述べており（長神 2007）、「サイエンスコミュニケーター」達が集まり、専門家と交流をする点は、我々にとっても注目に値する。研究者が活動内容の訴求と同時に専門家と交流する形態は、ブース展示と類似するからで

ある。しかし、スケールメリットが効果の大きさに繋がらないのは、どんな領域においても起こることだろう。このように多額の費用と労力を要する大規模イベントの開催が容易でないのは言うまでもないが、実際、サイエンスアゴラ 2006 は「サイエンスコミュニケーター」同士の交流に加えて市民と科学技術との交流も目的としたため、大勢の参加者が集まった分、企画目的がイベント全体に浸透せずに、参加者達からその曖昧さを指摘する意見が多く上がったという。同じ場で同時に機能することで効果を発揮するという目標は達成できなかったと長神は述べている。（長神 同）

##### 4.1.2. サイエンスカフェ

もっと小規模で直接市民と交流するアウトリーチ活動に、サイエンスカフェがある。市民と科学者が対等な立場で、カフェや小スペースで科学について対話する形式である。各地の大学や科学技術振興機構といった公的機関、各種団体によるものまで広く行われ、定期的に開催されている企画も多い。規模や参加者が少なくて済むので開催や広報が容易であるし、近しい距離感で市民の声を受け止められるので、一般感覚からの視点で自分たちの活動を振り返ることが出来る。研究活動の訴求という意味でも、場と集まった人々に合わせた直接的なメッセージを伝えることが出来る。しかし、一度の開催でアプローチ出来る対象者の少なさはいかんともしがたく、費用対効果や効率の面では、開催目的や開催後の成果を吟味しなくてはならないだろう。

このように、アウトリーチ活動の形態によって、それぞれ長所と短所がある。規模と効果、費用、労力などを勘案し、実行する領域を選択する必要がある。

##### 4.2. Jung による6つの決定要因

Jung, M. (2005)は200人の質問紙調査を行い(内、有効回答数195)、ブース展示のサービスの質と参加者に認知される決定要因の実証を試みた結果、6つの要

表6 six dimensions of exhibition service quality (Jung, M. 2005 訳筆者)

Dimension	決定要因	重要度
1) booth management	マネジメント	6
2) contents	展示内容	1
3) registration	記録	5
4) access	アクセス	4
5) booth layout and function	レイアウトと機能	2
6) exhibition and booth attractiveness	魅力的かどうか	3



因と重要性が明らかになった (Jung, M. 2005). 展示内容が最も重要であり, 二番目に重要だった項目は, ブースのレイアウトと機能だった (表 6). この 2 つ以外の要因同士の差は, 小さかった. また, ブースのサービスの質と全般的な満足度, および参加者の行動志向の間には, それぞれ強い相関が認められている.

従来の知見からすると 5) のレイアウトと機能が 1) マネジメントに勝る, という結果は予想外であり, 今後人々は個々の商品・ビジネスの詳細よりも, より一層全体的なブラウジングー拾い読みーをすると Jung は述べている. たしかに人々が常時大量の情報に接する現代社会では, 効率的に必要な情報を入手するために自然とブラウジングをするようになり, 習慣化すると思われ, 今後さらにこの傾向は進むだろう.

この結果からすると, ブースの展示は一見して分かるように視覚的に訴求するものが来場者の目に止まりやすく, かつ関心をもってもらえる, ということだろう. 立ち止まってもらった上で具体的な展示内容の話に進み, ブースに立つ人と来場者の会話が始まる, というコミュニケーションの流れが想定できる.

#### 4.3. 今後の改善点と展開

展示内容を充実させるのは当然のことながら, やはりブースでのやり取りは展示内容を見ながら行うので, コンテンツの訴求度は重要である. 教育プログラムの内容は, これまで毎年の実践を受け, さらに実際の受講生の声を反映させて変更や微調整を行っている. 本事業は 2 大学が連携して様々な専門分野の教員が担当しており, 事務方も含め関わるスタッフが多い. したがって多方面にわたる知恵の集積が可能であり, 今後は慢性疼痛, 多職種連携チーム医療の両方の視点から, プロジェクトを訴求する内容に更新していくよう努める. また, 来場者のブラウジングに対応するべく展示の見やすさやデザインを, 一見して興味を引く魅力的なものにすると共に, 来場後にわたりプロジェクトの訴求が続くような配布物も工夫していく必要がある.

そして今後は, 専門家の向こう側にいる対象者を拡大するために, ブース展示を行う学術領域を多様化して専門家の範囲を広げる, すなわち多職種連携医療領域の研究者, 関係者, 教育領域の研究者, 関係者が集まる学会での出展も検討できるであろう.

#### 5. まとめ

三重大学／鈴鹿医療科学大学の 2 大学連携事業の学会ブース展示について述べた. 日本ではまだ数少ない

アウトリーチ活動の取組みとしての実践報告と, 研究機関や研究者が実践する意義について考察をした. 学会でのブース展示は, 近接領域の専門家と直接的な双方向のコミュニケーションが可能であり, さらに訴求効率の面でも有用な形態である.

これらの成果を受け, 我々は今後のプロジェクトの展開においてもブース展示を引き続き活用し, 新たな発展を望んでいくものである.

#### 謝辞

鈴鹿医療科学大学において本合同事業のプロジェクト・リーダー, サブリーダーを務める豊田長康学長, 鎮西康雄副学長には, 日頃よりご指導を賜りまして感謝申し上げます. 鈴鹿医療科学大学薬学部大井一弥教授, 三重大学医学部看護学科辻川真弓教授をはじめとする「鈴鹿医療科学大学・三重大学慢性疼痛教育合同会議」のメンバーの皆様, プロジェクトで共に働き協力を賜っている先生方, 事務職員の皆様, スタッフの方々, 学生サポーター諸君, ㈱ウィルシードスタッフの皆様に感謝申し上げます. 皆さまの協働があつてこそ, 本事業は運営され発展していくものです. 改めてここにお礼申し上げます.

#### 注

1) アウトリーチ活動: 国民の研究活動・科学技術への興味や関心を高め, かつ国民との双方向的な対話を通じて国民のニーズを研究者が共有するため, 研究者自身が国民一般に対して行う双方向的なコミュニケーション活動

#### 参考文献

独立行政法人国立大学財務・経営センター(2008)『国立大学法人経営ハンドブック (3)』独立行政法人国立大学財務・経営センター.

Jung, M. (2005) *Determinants of Exhibition Service Quality as Perceived by Attendees*, *Journal of Convention & Event Tourism*, 7:3-4, 85-98.

上條史絵・丸山一男・横地歩・島岡要(2019)「三重大学／鈴鹿医療科学大学合同教育プログラムー慢性疼痛多職種連携医療の進展に向けてー」『三重大学高等教育研究』25, 9-21, 三重大学地域人材教育開発機構. 文部科学省(2005)「アウトリーチの活動の推進について」学術研究推進部会第 10 回配付資料 資料 3 - 5 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/008/siryu/attach/1342833.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/008/siryu/attach/1342833.htm))(2019 年 9 月 5 日).

長神風二(2007)「サイエンスにおけるより大きなつながりに向けて：サイエンスアゴラ 2006 実施総括」『科学技術コミュニケーション』 1,14-24.  
内閣府(2006)「第 3 期科学技術基本計画」(<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/honbun.pdf>)(2019 年 12 月 24 日).  
Soilen, K. S. (2013) *Exhibit marketing and trade show intelligence: successful boothmanship and booth design*. Springer Science & Business Media.

## SUMMARY

Government-funded educational and research projects require the stake holders at the academia to be accountable to tax payers. Thus, the academicians need to implement an effective outreaching activity to share with the public new knowledge resulting from the projects. Here we describe our outreaching experience to use a booth exhibition at healthcare conference for publicizing our MEXT-funded educational project to promote the inter-disciplinary collaborations between healthcare professionals for the chronic pain management, which has been jointly operated by Suzuka University of Medical Science and Mie University. We have retrospectively investigated our booth exhibition activities (n = 4), thereby supporting the idea that the outreaching activity using a booth exhibition at the project topic-related conferences is an effective approach to directly communicate with the targeted audience/customers.

**KEYWORDS:** booth exhibition, outreaching activity, science communication , chronic pain , interdisciplinary collaboration

---

† Shie Kamijo\*<sup>\*2</sup>, Kazuo Maruyama, M.D., Ph.D. <sup>\*3</sup>, Junko Maruyama, M.D., Ph.D.<sup>\*4</sup>, Keiji Asada\*, Ph.D., Kazuhiro Ito\*, Kenta Ushida<sup>\*3</sup>, Ayumu Yokochi, M.D., Ph.D.<sup>\*2</sup>, Motomu Shimaoka, M.D., Ph.D. <sup>\*5</sup> : An academic outreaching activity using a booth exhibition at healthcare conferences

\* Faculty of Health Science, Suzuka University of Medical Science, 1001-1 Kishiokachou Suzuka-City, Mie, 510-0293, Japan

<sup>\*2</sup> Department of Anesthesiology, Mie University Hospital, 2-

174, Edobashi, Tsushi, Mie, 514-8507, Japan

<sup>\*3</sup> Department of Anesthesiology and Critical Care Medicine, Mie University Graduate School of Medicine

<sup>\*4</sup> Faculty of Medical Engineering, Suzuka University of Medical Science

<sup>\*5</sup> Department of Molecular Pathobiology and Cell Adhesion Biology, Mie University Graduate School of Medicine